

生きることを
あきらめない強さ



満洲浪漫

夢見た 見た 滝原書店

大島幹雄 本体2800円

『丹下左膳』の作者林不忘（本名長谷川海太郎。谷譲次、牧逸馬の筆名も）をかしらに画家の瀧二郎、詩人の瀧作家の四郎と続く長谷川四兄弟。その中で一般的な知名度ではいちばん劣る三男瀧の評伝が出たのは驚いた。

本業はサーフィン・プロモーターという

著者は、一世を風靡した伝説の「呼び屋」で作家有吉佐和子の夫でもあった神彰の評伝（『虚業成れり』）を書くため取材するなかで、神とともに働いた瀧のことを見つたといふ。

長谷川瀧は一九〇六年函館生まれ。アメリカ各地を放浪した長兄海太郎の影響を受けて海を渡り、新天地満洲で学び、

その後、官吏となる。ロシア語ができるのを見込まれて入社した満洲映画協会（満映）時代には、翻訳を手がけたバイコフの小説『偉大なる王』がベストセラーになる。友人らと文芸誌「満洲浪漫」を創刊し小説を発表。本物の満洲文学を書きたいと、白系ロシアの農民集団コザックと暮らすために、国境地帯の三河に単身、移り住んだこともあった。

瀧が描いた夢はしかし、日本の敗戦で砕け散る。満映理事長の甘粕正彦とは不思議にうまがあつたが、甘粕が自殺する場にも立ち会つた。ソ連軍が侵攻、次いで八路軍が進軍してきた新京では辛酸を舐め、引き揚げの旅の途中で幼い娘は命を落とす。

やつとの思いでたどりついた日本で待っていたのは挫折の日々だ。財産も職もなく作品發表の場も限られ、映画館の雑用などして糊口をしのいだ。貧しさの中で、長男瀧が腸結核で死ぬ。

苦しい生活から浮上するきっかけと見えたのは、一九五六年、神彰と企画した

ではのアイデアで、国際電話で交渉するなどそのロシア語の力があつて実現したが、一ヶ月半の全国公演が大成功に終わる頃、満洲時代に患つた結核が再発して入院、成功は神ひとりのものとなつた。これから、とくに病に道を塞がれる。瀧の人生はこのくりかえしだった。晩年も病身をおし通訳として木材船に乗り込むなど、経済的にも恵まれないまま、六十七歳で亡くなつた。

それでも瀧の人生は読む者に不思議な感銘を与える。生きることをあきらめない強さを著者が瀧の中に見出していくからだろう。「青鸚」と名づけた日記代わりのノートに詩や小説の下書き、本や映画の感想を死ぬまで書き続け、すぐれた芸術を通して国境を越え人々がつながるという夢を見続けた。全部で百三十冊あまり残された白筆ノートを著者はていねいに読み解き、何を成したかではなく何を成そうとしたかの思いを汲みとつて、波乱に富んだひとりの男の人生を鮮やかに描く。

（文芸ジャーナリスト・佐久間文子）